

命をつないだ「七福藪」と久保田勇次郎

広島県 矢野町郷土史研究サークル・^{ほっきかい}発喜会 理事

やまもと まさふみ
山本 雅典

1 はじめに

広島駅から海岸線沿いに東（呉市方面）へ9 km走ると呉線矢野駅である。近くに尾崎神社があり、その麓の市道沿いに三つの記念碑が並んでいる。その一つが「甘藪之碑」である。

明治期に移民先から2度にわたり秘かに持ち帰った甘藪（三徳藪、七福藪）の普及に努め、特に戦中戦後にかけての食糧難の時期には代用食料として、また戦時期の代用燃料資源として貴重な役割を果たした、久保田勇次郎氏（1857-1940没）の功績を称えて、有志11名が大正4年（1915）8月に建てた顕彰碑（写真）である。



「甘藪之碑」大正4年建立

昭和12年（1937）頃に、久保田勇次郎氏の出身地である矢野小学校の生徒が大いに歌ったという矢野を讃える「矢野小学校の歌」に次のような一節がある。

（四）^ほほも^ろちなんこの甘藪（かんしょ）

我がふる里へお土産と

太平洋の波越へて

持ちて帰れる久保田氏（うじ）

陰徳四方（いんとく、よも）に伝わりて

七福藪の名も高し

さらに、広島県矢野町史（下巻・昭和36年刊）は、久保田勇次郎氏を次のように記す。「甘藪の優良品種として知られる三徳藪（一般には源氏または元気）と七福藪（メリケン白またはアメリカ藪）は、ともに矢野の人久保田勇次郎が豪州と米国からもたらし普及したものであって、両種甘藪の栽培普及の陰にある同人の努力と功績は計り知れないものがある」と。

2 「移民県」広島

矢野村は三方を山に囲まれていて、平坦な農地も少なく、零細であった。明治18年（1885）に一農民当たりの耕作面積は、安芸国（矢野村を含む）の場合1反10歩で、全国最下位から第2位（フェスカ『日本地産論』）。そのため、暮らしを立てるため、

北海道への移住がいち早く始まるなど、移民・移住が素直に受け入れられる状況にあった。因みに、北海道札幌市の隣の北広島市は、明治17年に広島県出身者が集団移住したことで名付けられたものである。

こうした気質・気風があったため、明治以降は海外への渡航が盛んにおこなわれ、久保田勇次郎氏が2度にわたり海外移民したことは当時通常のことだったといえる。

■資料

広島県は全国1の移民県

国際協力機構（JICA）横浜海外移民資料館（横浜市）によると、広島県からの移民は戦前、戦後を合わせて109,893人にのぼり、全国第一位。隣県の山口県は57,837人で、沖縄、熊本県に次ぎ第4位。中国地方の2県だけで全体の20%を超える。

広島、山口両県に移民が多い背景には、さまざま要因があると思われるが、①一人当たりの耕作面積が少ないうえ、不況にさらされていた。②初期の移民労働者の評価が高く、両県出身者を指定した雇用主がいた。③先発の移民者が、郷里の人を呼び寄せた、などが指摘されている。また、広島県からの戦前の移民先は、ハワイ（39%）、米国（30.8%）、ブラジル（8.8%）、フィリピン（5.4%）の順である。（2017.10.7 中国新聞より）

3 矢野村での甘藷栽培のはじまり

矢野村（当時）での甘藷導入の歴史は明らかではない。しかし、隣村の坂村の資料

によると、「坂村は早くから遠洋漁業も盛んで、さつま芋については「享保10年（1725）山林開墾して作付けと申し伝へあり（文化12年（1815）国郡志御編集ニ付下志らべ書出帖）」とある。薩摩藩は戦備用として藩外に種芋を持ち出すことを厳禁していたが、耕地が狭く打ち続く米の不作に悩んでいた瀬戸内海地方の人々が、薩摩藩の監視の眼が届きかねる琉球より種芋を持ち帰ったことにより「琉球いも」と呼ばれ、傾斜地には麦とさつま芋の栽培が最も有利なものとして行われて来た」とある。矢野村でもおよそこの時期に甘藷が伝播して、村内の段々畑を中心に栽培されていたのであろうと考えられる。

4 「三徳藷」

久保田勇次郎氏は安政4年（1857）9月4日、矢野村の農家に生まれた。勇次郎氏は2回渡航しているが、そのたびごとに、移民先から甘藷の種藷を持ち帰っている。

初めは明治26（1893）年5月21日、郷里矢野村を出発、契約移民としてオーストラリアに渡航、クイーンズランド州マッカイ村のエーデー・カートナー氏のサトウキビ農園に雇われて、農業労働に従事していた。ところが、同年7、8月頃になって脚気（かっけの病）にかかり、一時は危篤にまで陥った。のちにその時期ことを「私は故郷の氏神様に快癒を祈願しましたところ、『危ない時には自分が最も好むものを食べよ』とご神託になりました」と。

そのころ、オーストラリアには甘藷は少なかったが、同じ移民の中国人が、「イギリス芋」と呼んで、テンプラにしたり、蒸したりして食べるのを見て、勇次郎氏も甘

薯を常食とした。これが薬となったのか、日増しに元気になり、ついに全快した。全快記念にと、郷里でも栽培したらと思って、明治27年種イモを郵便で送った。

翌28年7月の帰国に際して、同じく種イモを数個を持ち帰って、栽培普及を図った。勇次郎氏はこの芋を「三徳薯」と呼んだ。「美味にて、作りやすく、腐りにくい（保存しやすい）」という三つの利点からで、幸い、知人に分け与えたところ好評で、次第に栽培が広まっていった。

久保田氏はのちに、この品種について「元氣又は源氏とも呼ばれているが、元氣はこの芋のおかげで私が元氣になったのを記念するため、試験場さんとかが名付けてくださった」と。また「三徳薯が、大正14年に私が初めて移植したことを愛媛県の試験場が本に載せておられることを知りました」と語っている。

「三徳薯」は「源氏」「元氣」の異名とともに、明治28年の帰国以来、大正年間から昭和初期にかけて、四国・九州・中部地方の西日本を中心に広まり、農水省の統計によれば、昭和15年には「源氏」として103千ha（全作付面積の38%）に達し、他の在来品種を大きく凌いだのであった。

5 「七福薯」

オーストラリアから帰国して3年目の明治30年3月16日、今度は弟吉松と共にカナダに渡り、バンクーバーを経て、米国サンフランシスコに着いた。ここから少し隔たったドライクリーキガイスベル村のイタリア人ベール氏に雇われ、ブドウ畑の除草等の労働に従事した。このとき同家で栽培していたのが、ベール氏がイタリアから数

個持ち込んでいた「シュガーポテト」と呼ぶ甘薯だった。

その薯を試食した勇次郎は、「三徳薯も到底之に及ばず嗜好上常食にも適し耐久力もあることを知り、これこそ日本に広めても良いと思い金銀を発見したより以上に愉快で…」と語っている。明治32（1899）年の帰国に際して2個を貰い受けた。帰国に当たっては荷物の中に隠して税関の目を逃れて持ち帰り、帰国後も気候の変化のため腐敗することを恐れ一層の注意を払った。1個も食することなく、矢野村小越地区の久保田家の畑で栽培し、翌年は、種イモを知人の坂橋廣次・上泉国松・天畠勇次郎・秦升太郎・本田幾松の各氏に分け、普及への協力を頼んだ。栽培の結果はいずれも在来種をしのぐ立派な薯ができた。

「イタリアの砂糖芋」と云って評判になったが、アメリカから持ち帰ったので「アメリカ薯」という人も多かった。しかし、久保田氏は思いを込めて「七福薯」と名付けた。その理由は、

- ①どんな風土にも適し、
- ②作りやすく不作なし、
- ③貯蔵に耐え、
- ④まことに美味にて、常食に料理用にも好適で、
- ⑤イタリア、⑥アメリカ、⑦日本と順次に渡り、どこでも誰にでも好かれる徳が多分に備わっていることから、私が命名したのです」と語っている。

6 功績を讃えた「甘薯之碑」

このような久保田氏の偉大な功績を讃えて、大正4（1925）年8月に有志11人が発起人となり、尾崎神社北側（現矢野西小入

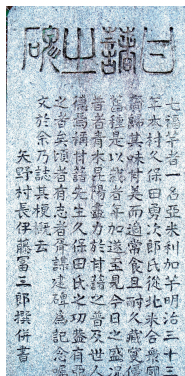
口)に「甘藷之碑」を建立した。さらに大正7年には「三徳藷また七福藷を試作し培養に努め、種藷を広く配布した」として矢野町長から表彰状が贈られている。

(銘文)

甘藷之碑

七福芋者一名亜米利加芋明治三十三年本村久保田勇次郎氏從北米合衆国齋歸其味甘美而適常食且耐久藏憲優旧種是以栽者年加逐至見今日之盛況昔者育木昆陽尽力於甘藷之普及世人德焉稱甘藷先生久保田氏之功益有垂之者臭頃者有志者管謀建碑為記念囑文於余乃誌其梗概云

矢野村長伊藤富三郎撰併書



概略を記す次第である。

(矢野中学校刊「矢野歴史探訪」より)

更に、大正13年(1924)には、愛媛県立農業試験場からわざわざ久保田勇次郎氏を訪ねて、七福藷が優秀なことを伝えて、試験成績、写真を手渡している。



碑ノ藷甘ト氏郎次勇田保久 者入輸番福七

甘藷之碑と久保田勇次郎

(その内容は次の通り)

七福芋(別名アメリカ芋)は明治三十三年(一九〇〇)に矢野村の久保田勇次郎氏が北米合衆国から持ちこてきたサツマイモである。それは甘くておいしく、常食に適し、しかも貯蔵に耐えるので、従来の品種より優れており、これを栽培する者も年々増加し、今日の盛況を見るに至った。昔、青木昆陽はサツマイモの普及に尽力し、世人は感謝して「甘藷先生」と称したが、久保田氏の功績もそれにつぐものである。近頃、有志が相談して記念碑建立を計画し、碑文を私に頼むので、その

7 農商務省も優良品種として配布

大正14(1925)年に当時の農商務省農務局は、愛媛県立農事試験場などの栽培試験の結果から品質・収量などに優れているとして、各県に対して「(七福藷は)相当優良と認めれるを以て更に地方的に優劣を比較するため…試作用として種藷の配布を行う…」と通知(図1・表紙)したことから、一気に七福藷の名が全国に知れ渡ることになった。

これを機に、昭和14年7月5日に広島県農会長からの感謝状が授与される。文面には「…、今や支那事変に直面し、燃料国策として無水酒精原料甘藷の増産を策しつつある国家施策に貢献する…」とある。さら

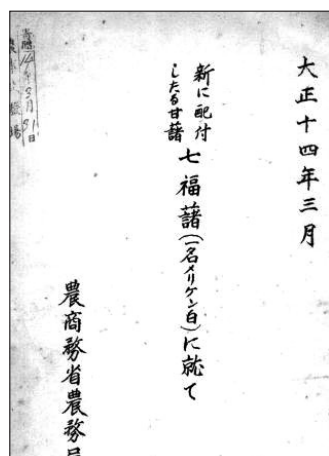


図1 配布書表紙

に同7日には安芸郡農会長からの表彰状には、「栽培普及に力を注ぎ…貴下年齢八十有余に及ぶも尚終始一貫愛国重農の至情…」とある。

いずれも当時の時代背景を知ることができる好資料である。

8 食糧難の軽減に果たした役割

このように七福蒔の評価が高まるに従い、栽培面積も増加し、昭和7年には国内作付面積の8%を占めるに至っている。更

に、外来種である七福は品種改良の交配親として適したためこれに盛んに用いられた。

図2の通り、七福と元気（源氏と同品種かは不明）との交配で、農林1号（昭和8年）、護国蒔（昭和7年）が育成され、七福と潮洲との交配で沖縄100号（昭和9年）が育成され、沖縄100号と吉田（太白）との交配で農林2号（昭和17年）などの数多くの農林番号シリーズの交配親に利用されている。これらの品種は多収であったので、第2次大戦の戦中・戦後の食糧難時代に大增産され、護国蒔、沖縄100号、農林1号、2号の4品種のみで全作付面積の58%を占めたと記録されている。

ここに記すように七福蒔の後代種が戦後の食糧難の軽減に果たした功績は多大なものがあ、国民の命を長らえたことは今後とも記録にとどめるべきものと言えよう。

9 広島県の甘藷栽培

「七福蒔」の栽培は、広島県内はもちろん隣県にも急速に広まり、農家の経営改善にも大きく貢献した。この時期、国は国際

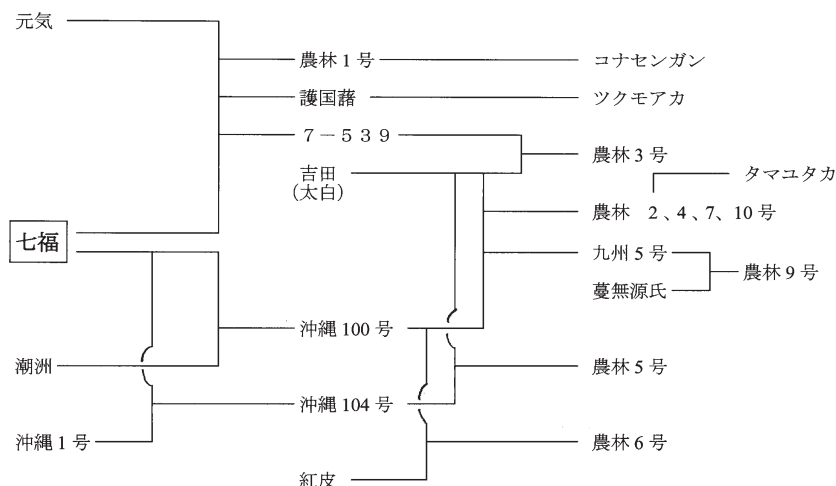


図2 七福を親とする品種系統図

((一財)いも類振興会調べ)

情勢に対応して食糧資源として、また澱粉価に着目して甘藷の増産に取り組むことになった。

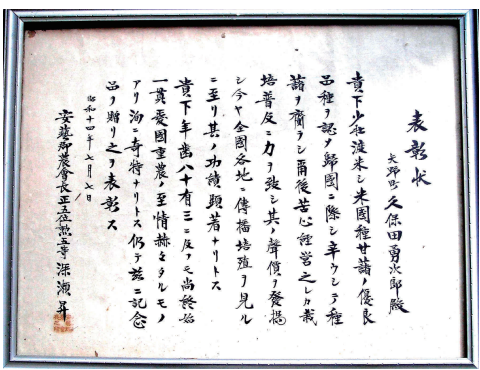
昭和10年代（後半）には、広島県では甘藷増産運動を展開し、生産目標の達成を推進するため、各地に甘藷増産指導員を配置するなどしている。農林省によれば当時の品種は下表のようである。

品種の動向は、世相の動きに左右される。昭和期に入るとわが国は「不景気から戦争へ」の時代で、日中戦争（昭和12年）、国家総動員法公布（同13年）、第二次世界大戦（同14年）とつづき、甘藷は米麦に次ぐ主要食糧として一層重要視され、さらにガソリンの代替燃料資源としても注目されることになった。「甘藷を増産しよう」運動が展開されている。

この時期の広島県農會刊「藝備農報」の記事でも、時代の推移と甘藷の役割を知ることができる。すなわち、

- 昭和6年7月 自給自足で難関を切り抜けよう
- 同7年4月 5倍とれる甘藷の植え方
- 同10年5月 理想的な甘藷の作り方
- 同14年3月 燃料酒精（アルコール）原料甘藷多収協議会表彰一

- 6月 論文「甘藷を増産せよ一国のため、家のため一」
- 9月 広島県農會長が久保田勇次郎氏へ表彰状を、また安芸郡農會長などから感謝状が贈られる。



広島県農會長からの表彰状

- 同16年3月 主張「甘藷を増産しましょう」
- この時期、西日本各県は七福藷を食糧増産対策として、また澱粉含量の多さで工業用としても推奨品種にしている。
- （昭和16.12.8 アジア太平洋戦争始まる）
- 同17年2月 広島農事試験場が七福藷を推奨

広島県における主要品種の作付動向（比率％）

品種 年次	源 氏	七 福	農林 8号	農林 2号	沖縄 100号	護 国	農林 1号	農林 3号	岐阜 1号	その他	計
昭和7	40	30	—	—	—	—	—	—	—	30	100
19	26	—	—	—	1	50	—	—	—	23	100
22	2	1	—	3	5	70	—	2	—	19	100
26	5	2	—	9	2	55	14	4	—	6	100
29	2	1	1	5	—	62	16	6	2	5	100
32	4	3	1	8	—	50	19	5	2	8	100

（註） 明治期には三徳藷（源氏）と七福藷（アメリカ藷）が大半を占めていたが、次第に元氣×七福藷の交配種である護国の割合が高まっている。

18年3月 甘藷反当千貫収穫法
3月 広島県が県下の篤農家30名
に甘藷増産指導員を委嘱
(昭和20.8.15 第二次世界大戦終わる)

このような経緯で戦中・戦後期には頂上
近くのみで山林開墾がおこなわれ、庭先の
小さな空き地も甘藷で覆いつくされた。

10 忘れられた七福藷、どっこい 七福 藷は生きていた

戦後の昭和30年代からは食糧事情の好転
にともなって、七福藷の発祥の地である矢
野地域でもすっかり七福藷は姿を消すこと
になった。

しかし、平成26年2月初めのこと、テレ
ビの旅番組で瀬戸内の小さな島で生産され
る珍しい特産品を訪ねる番組を偶然に見る
機会があった。

特産品とは、他所では決して見られない
不思議な「白いサツマイモ・七福藷」だとい
う。旅人が向かう小さな島は、新居浜市
の沖合1.2kmに浮かぶ周囲8kmの大島。
甘藷と柑橘が主要な産物で、資料によると
「七福藷」は戦前から盛んに栽培され、一
時は途切れかけたりした時期もあったが、
それでも美味しい白いイモとして栽培され
つづけている。

新居浜市大島の人々は「なると金時も足下
(しもと)にも及ばない七福藷は大島の宝
物」という。その大島では、地域起こしゲ
ループが白いも「七福藷」に着目して
NPO法人の認定を受け、平成16年12月
には「大島白イモ特区」の指定を受けて、
白いもの生産・加工・特産品づくりに乗り
出している。白いも焼酎、白いも本練羊羹、



テレビで紹介された七福藷

白いもお菓子などを開発してネット販売を
している。また、新造された連絡フェリー
には七福藷に因んで「おおしま7」と命名
されているという。

11 発祥の地で産地復活の機運

発祥の地で忘れられた七福藷が愛媛県大
島で栽培されていることを知った矢野農事
研究会のメンバーから、「矢野でも七福藷
を復活できないか」、「七福藷で地域の活性
化を」との気運が生じた。JA広島市矢野
支店の協力で、まず大島を視察し、次いで
タネ藷を取り寄せ、苗づくりに取り組んだ。

秋の恒例の矢野町農業祭では七福藷の品
評会を開催し、20点近くの出産を見た。

試食の焼き芋コーナーが設けられ、明治



矢野町農業祭での七福藷の展示

期に久保田勇次郎氏がアメリカから持ち帰った「七福蒔」が披露され、参加者は久保田勇次郎氏の功績を知り、あらためて称賛することになった。



七福蒔品評会の最優秀賞作品

12 産地化は多難だが、

地域での農業者の高齢化はすすみ、傾斜畑での普及拡大は容易でないのが実情である。平成27年度以降、農事研究会会員を中心に40名ばかりが栽培しているが、栽培規模は小さい。事業化をめざすには面積拡大による生産量の増大が必須であり、これからも長い道のりが必要とされている。

学校教育の場では郷土の歴史を知る場面、あるいは幼稚園の体験学習の場が活発に取り入れられている。次世代が七福蒔と久保田勇次郎氏を知り、末永く伝承してほしいものである。

13 おわりに

久保田勇次郎氏がはるばるアメリカから秘かに持ち帰った二個の小さな七福蒔は、その特性が高く評価され、その血統を継ぐ数多くの品種を残したが、この中には戦中戦後期の主要食糧として幾多の命を救うという大きな役割を担った。「甘蒔之碑」は、こうした久保田勇次郎氏の労苦と功績を次



農事研究会会員による試験栽培

世代にむけて語り続けることであろう。

広島が生んだ「七福蒔」の久保田勇次郎氏は、昭和15年2月24日、85歳で逝去、七福蒔を試した小越地区の墓地で眠る。



晩年の久保田翁

なお、広島県農会刊の「芸備農報」誌は、久保田勇次郎氏の功績に触れ、次のように述べている。

「往古土佐の藩士野中兼山、江戸に航し帰途に臨み多くの蛤を買い求めて、土佐湾まで持ち帰りて、悉くこれを海に投じて其繁殖をはかり永久の土産としたことがあるが、久保田氏の行為も好一対であるといっているのである」と。